

## T-sawを用いて環納式椎弓形成術を行った脊髓腫瘍の5例

柴山 元英<sup>1)</sup>, 太田 弘敏<sup>1)</sup>, 高橋育太郎<sup>1)</sup>, 門司 貴文<sup>1)</sup>, 西野 正洋<sup>1)</sup>

脊髓腫瘍手術には通常、椎弓切除術が行われるが、腫瘍へのアプローチのため、直接病変の及んでいない椎弓や後方の軟部組織を犠牲にすることが多い。そのため術後の変形や、癒着による laminectomy membrane が問題となることがある。今回我々は、より解剖学的、生理学的な脊柱の再建、支持性の獲得を目指して、T-sawによる環納式椎弓形成術を用いて脊髓腫瘍摘出術を行った。

### 症 例

症例は5例で、年齢は10～69歳。全例胸椎下部から腰椎部の脊髓腫瘍であった。術式としては関節突起間部切除が3例、椎間関節内縁切除が2例であり、2椎間が1例、3椎間が3例、4椎間が1例であった。腫瘍は5例とも良性であったが、病理診断は髄膜腫、神経鞘腫、上皮腫、椎間板のう腫、類表皮のう胞腫だった。切除した椎弓は、脊髓操作終了後に吸収糸で縫合固定した。

### 結 果

術後神経損傷、感染は無かった。術後早期より、硬性コルセットで車椅子、歩行を許可したが、合併症もなく、平均4ヵ月で全例骨癒合を得た。また経過観察中に脊柱の変形も認めなかった。

症例5では6ヵ月後に再手術を行ったが、硬膜との癒着も少なくスムーズに展開することができた。なお再手術では椎弓切除を行った。

### 考 察

椎弓形成術/骨形成的椎弓切除(椎弓を保存する手術)の歴史は古く、1950年の近藤<sup>1)</sup>の腰椎椎間板ヘルニアへの椎弓形成術の報告を始めに、Raimondiら<sup>2)</sup>の脊髓腫瘍手術の椎弓形成術など種々の報告があり、椎弓形成術、骨形成的椎弓切除、環納式椎弓切除(形成)術、recapping laminoplastyなどと称されている。手技的に困難さがあったが富田ら<sup>3)</sup>のT-sawの出現で安全に、またcutting lossも少ないため、より完全な環納が可能になった。

表

症例	性	年齢	部位	病理	経過	術後安静	骨癒合
1	男	10歳	Th11-L2	epidermoid cyst	18ヵ月	2週目より体幹ギプスで車椅子へ	4ヵ月
2	女	58歳	Th10-12	meningioma	17ヵ月	2日目よりフレームコルセットで車椅子へ	4ヵ月
3	男	69歳	L1-2	Schwannoma	16ヵ月	2日目よりフレームコルセットで車椅子へ	6ヵ月
4	男	37歳	Th11-L1	discal cyst	12ヵ月	2日目よりフレームコルセットで車椅子へ	4ヵ月
5	女	13歳	L3-L5	ependyoma	6ヵ月で再手術	7日目よりフレームコルセットで車椅子へ	3ヵ月

Recapping laminoplasty for spinal cord tumors : Motohide SHIBAYAMA et al. (Department of Orthopaedic Surgery, Toyokawa City Hospital)

1) 豊川市民病院整形外科

Key words : Spinal cord tumors, Laminoplasty, Threadwire saw